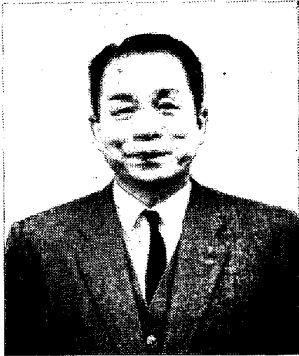


随 想

鉄鋼業界と断絶

矢 野 巖*



最近、新聞雑誌に「断絶」という語をよく見かける。ドラッカーの“The Age of Discontinuity”を林雄二郎氏が“断絶の時代”と訳されたところから流行し始めたらしいが、「断絶」という語は、「お家断絶」とか「国交断絶」とかとにかく危機的な感じの強い言葉である。ドラッカーのこの日本語版がベストセラーになつたことの背景には、「断絶」という訳語の訴える危機感が、現在国民一般の持つ危機意識に微妙にマッチしたことも寄与しているのではないかと、ひそかに考えている。

日本鉄鋼業界の戦後の発展については、すでに大方の識者の指摘されるように、まことにめざましいものがある。この過去の趨勢を基礎に、予測できる諸要因を加味してその延長線上に未来予測を行なえば、おそらく粗鋼生産量は、米国を凌ぎ世界第一となる日もそう遠くはあるまい。さらに国民1人当たり粗鋼生産量がすでに米国を抜いているといつても、過去の鉄鋼蓄積量の低さとか、輸出の伸びがなお相当期待できるとの予測などから、将来を悲観するには当たらないという結論もでよう。現に近い将来の予測については、すでに鉄鋼連盟から海外でも注目されるような立派な調査資料が発表されている。鉄鋼業に関する限り「断絶」とか危機感といったものは杞憂にすぎないのであろうか。

最近識者の間で、1970年代の鉄鋼業の前途に横たわる障害として若干の問題点が提起されている。「原料資源」「若年労働者の確保」「国際経済動向とその輸出市場に及ぼす影響」などの諸問題である。いずれもその萌芽はすでに数年前から認められた問題であり、言うなればこれらは鉄鋼業界に生起した世界的な「断絶」の現象形態といえぬこともない。量的な趨勢からだけでは予測できない質的な転換を迫られる問題が、これらには内在していると思われる。

私は「断絶」という語は悲劇的なにおいがしてあまり好きではない。「断」は「断念」に「絶」は「絶望」に通じる。「世代の断絶」に至つては、何か越えることのできない「断崖絶壁」を連想させる。あらゆる個々の人々の努力や善意が、この語の前には無力であり空しいものであるかのような錯覚に捉われる。確かに組織されないバラバラの努力が有効であるには、現代の社会はあまりにも多元的に組織されすぎているのかもしれない。小は現場作業の改善から大はアポロ計画に至るまで、すべてはシステム化され、個人は全く無力化したのであろうか。

鉄鋼連盟が「QCサークル」「ZD運動」を統合した「自主管理活動」を広く鉄鋼業界の現場に普及させようとして、強力な運動を展開中であると聞く。私のささやかな体験によれば、若い高卒従業員が過半数を占めてきた現場の雰囲気は、個人の努力がどう職場の作業成果に貢献しているか、さらに職場や企業を通じてどのように消費者や一般社会に結びついているかを確かめたがつているように思える。またきわめて日本人的な特徴かもしれないが、提案でも個人よりも集団で、さらに提案の採用よりもその実施の成果に、より強い「やりがい」「生きがい」を感じているようだ。自己啓発ということが言われているが、このような自主管理活動の積み重ねを通じて誘導するのでなければ成果をあげることは困難と思う。

* 本会理事 東洋鋼鉄株式会社常務取締役下松工場長

「世代の断絶」は必ずしも越え難い断絶ではあるまい。もちろん上述の気風が若い世代のすべての面ではない。彼らはえてして自己中心的で、マイホーム主義であり、自由と勝手を混同しているとの批判もある。確かにそのような面もあろう。しかし為すべきことは為しう能力と意志を持つている。

鉄鋼業は最近、若い人々の就職対象としての魅力を失ないつつあると聞く。思いきつた時短や初任給の引き上げが、必要かもしれない。しかし時短や初任給の引き上げが、規格化された自主性のないレジャーに通じるのであれば、結果は本人にとつても企業にとつても何らのプラスにはならない。日々の仕事に「ハリ」を与え生活に正しいリズムを与えるためには、仕事そのものが個人の創意を活かしうるものでありかつ自主的な努力を要求されるものになることが、何よりも必要ではなかろうか。

日本鉄鋼協会が、原子力の直接利用を含む多面的野心的なプロジェクトを発表され、広く官民の協力を求めている。この各専門分野を網羅して産業の断絶に挑戦しようとする国家的世界的巨大プロジェクトに、大きな期待をかけたい。「断絶」がたとえ「断崖絶壁」であつても「断念」と「絶望」ではなく、かえつて躍進の機会であることを示していただきたいと願うものである。いま一つこのプロジェクトに期待するものは、激しい企業間の競争の結果現在存在すると考えられる企業間の壁を越えたプロジェクトとなることである。先に述べた個人と企業の関係ばかりでなく企業と業界、さらに進んで産業界全般の関係を近代化することが、われわれに課された使命と考えるからである。原子力の多面的利用の結果予想されるものは、鉄鋼業が従来 of 殻から脱け出て、他産業や地域社会とより密接な共存関係に入ることであろう。

終わりに会員諸賢のご健闘を祈るとともに、10月の広島大会に多数ご参加下さるよう実行委員の一人として切にお願いします。